歐洲戰場と天候（下）

文學士　中目覺

四　西部戰線と天候

茲には西部戰線の天候を述べる。

一九一四年秋より一九一五年五月に至る

兩軍とも行動は天候に伴うて行はれたと言うて宜しい。冬に近づきいづれも冬營の準備に取かゝる。獨逸はロッテルダムから羊毛皮、毛皮外套を買入れた。佛國陸軍省は地方長官に訓令して、兵士用の毛製下着、手袋、靴下や毛布を速に買上ぐべきことを命じた。又英國は印度兵の爲めに特に防寒具の調製に意を用ゐた。そして各國から多額の防寒具の注文を受取つたのは合衆國である。

冬の寒氣雨雪は塹壕生活者を非常に苦しめた。凍死、凍傷、呼吸器病が頻々と現はれた。其結果塹壕が非常に改良せられた。

フランダースで、尤も困難を感じたのは泥の中の大砲運搬であつた。それから敵味方共自動車道路の開通に全力を盡した。

十一月中頃に烈しい西風が雨を伴ひ、ニユーポル(Nieuport)の閘門から北海の水を陸上へ漲らした。聯合軍は助かつたが、獨軍は塹壕の中から洗ひ出された。爲めに水中の戰鬪が毎日の樣に行はれた。而して天候の最惡の時だけ戰鬪が止んだ。

一月五日から十五日までは雨、雪、霧、泥で軍事行動が全く止つた。一月中頃に佛軍がエーヌ(Aisne)河を渡つて退却したのは、洪水の爲めに橋が落ち、糧食運搬が不可能となつた爲めだと言はれて居る。此の如き天候の聯合軍に對する責めてもの利益を擧れば、敵の榴彈が泥の中に深く食ひ

込んでから破裂する位の事に過ぎない。

霧の烈しい時は砲兵戰は中止された。十月の末にはヴオージユ(Vosges)山に降雪があり、十一月の中頃には戰線全部氣温が氷點以下に降つた。十二月の初めにはヴオージユ山麓部防禦の各隊は深さ二尺の雪中の中で闘つた。一月には佛國のアルプス一隊がスキーで敵に突喚した。

春の雪解けまでは各方面概して不活潑に終つた

一九一五年五月より同年十月に至る

冬の樣な天候の妨げは有るまいと世人一般に信じて居つた。處が一方に暑氣の爲めに戰闘の困難を見た上に、雨も亦多く、霧も少からず、砲兵戰は不可能の場合多く、時々塹壕戰が行はれたに過ぎない。

一九一五年十月より一九一六年二月に至る

大體現狀維持であるが、西歐の變りやすい秋冬の天候と軍事的活動の消長とが密接の關係を示して居るのが特色と云うて宜しい。晴天には砲兵戰や空中活動が行はれ、雨霧には射擊が困難となり泥が軍隊の運動を中止せしめるといふのが原則である。英佛軍が九月十月にシヤンパーニユ(Champagne)及びアルトア(Artois)に進擊した時は多く濃霧を利用した。其後雨の爲に活動が鈍り、惰氣を生じた。十一月末には英佛擔當戰線は、雪の爲めに行動中止の狀態となつた。十二月に入つて暴風雨が頻繁となつた。十二月の初に當りイーゼル(Yser)地方の洪水の爲め、獨軍は其塹壕の一部を棄てた。十二月中頃には日々の雨、洪水、泥で大規模の戰闘が不可能となつた。毒瓦斯使用が盛んに行はれた二月初に佛軍の砲擊でシヤンパーニユにある毒瓦斯タンクが破壞せられ、丁度西風の時で獨軍の方に吹いて行つた。

各方面共一陽來復を待つて居つた。即ち二月末に至り獨軍のヴエルダン(Verdun)攻擊が始まつた

春になり天候の恢復と共に聯合軍の大前進を期待した獨軍は、其勢力を殺ぐ目的で、機先を制して此擧に及んだものと信ぜられて居る。所が少し早過ぎた。攻擊開始後間もなく大暴風があり、降雪があり、又それ以上に敵味方を惱ましたのは雪解けである。ために自然と惰氣を催した。毒瓦斯の使用を試みても、風が變りやすくて危險であつた

防寒の設備は前年より遙に進步した。ヴオージユ山の雪の多い戰場では、衛生隊が橇を使用した

一九一六年の春夏

ヴエルダン攻擊は、不良の天候の中にありて頑强に繼續された。結果は世人の知る通りである。春に於ては特筆すべき程の事はない。毒瓦斯は敵味方共に使用したが、兩方に失敗の場合があつた聯合軍は七月始めの好天氣を期してソンム（Somme）方面で大進擊を行つた。夏の間時々不良の天候が現はれ、霧のために聯合軍の步兵が聯絡を失つたことなどもある。

一九一六年秋冬

西歐特有の暴風勝ちの時期たる十一月中旬に至り、西部戰線には一般に降雪があつた。飛行も出來ず、砲擊も出來ず、塹壕から頭が出せぬとなれば、戰鬪は自然中止である。川や低地は氾濫する塹壕や彈穴（砲彈が地面にアバタの樣に作つた穴）に水が溜つて大部隊の行動が不可能となる。天候が好くなると活動が始まる。

冬になつてソンム戰の行はるべきことが秋の初に知れて居つた。所が十二月二十八日に英國のモーリス（Maurice）將軍は、天候不良の爲めに聯合軍のソンム進擊は豫期の效果を收めない、三月に至らば再び開始すると云ふ事を泄して居る。十二月二十九日のヘーグ（Haig）將軍の報告の中には、獨軍が全敗を免れたのは天候不良の結果英軍が思ふ存分に活動が出來なかつた爲めであると言うて

居る。

防寒の設備は前年より一層進歩した。防水薪などゝいふものも發明せられ、各種の防水具が使用された。英軍のタンクは西部戰線の秋冬期の泥には役に立たぬといふことが分つて來た。

一九一七年の春夏

一九一六年七月一日に始まつたソンム戰は、同年十一月には自然中止の狀態となつた。今年春に再び開始の說が行はれた。所が天氣が不良で實行されない。寒い日を選んで三月の初に獨軍の一部が退却した。之は能く天氣を豫察した結果と思はれる。間もなく暖い日が來り、霜解の爲め英軍の追擊が出來なかつた。

四月の末頃まで此不良の天候が續いたが、聯合軍は着々進出した。四月の末に天候が恢復すると今度は暑氣に惱まされた。また雨風も少くなかつた。軍事行動も其都度影響を受けた。

一九一七年秋より一九一八年初に至る

ヘーグ將軍の一九一七年一般報告にある如く、聯合軍の將卒は人間業以上の努力をしたが、例年にない降雨を初めとして、幾多の障害が敵の抵抗以上に軍の行動を妨げたのである。同じ不良の天候でも、獨軍が大に之を利用したことを聯合軍は認めて居る樣である。十月七日にヴォージュ山に初雪が降り。佛國の天は將に大に寒からんとして居る。

十一月二十日に英軍のタンクがカンブレー（Cambrai）方面で大に活動し成功をした樣である。之は天候を能く利用した結果であると云ふて、英軍側は自慢をして居るらしい。之から愈々冬になるが、例年の通り戰鬪中止の狀態となる。此冬は特に寒氣が強く雪が多い樣であつた。十二月廿九日の通信には全佛國に降雪があり、南はツーロン（Toulon）に及び、鐵道自動車の運轉が止つた處が

多いとある。冬は戰鬪中止の時期で、大戰は四月から十一月の間に限ると云ふて宜しい。

五　東部戰線と天候

一九一四年秋より一九一五年五月に至る

寒氣のために軍事行動が影響を受けたのは　東部戰線が最も著しい。ガリシヤからは九月の中頃に軍隊が寒氣のために惱まされて居るといふ通信が來り、十月初には雪中に行軍や露營が行はれた露兵は厚い外套を着て何とも思はぬが、墺國兵は少からず苦しんだ。東北部に於ては十月の初に寒氣が襲ふて來て、之れに獨兵が大に驚き、厚い外套を持たぬ爲めに甚しく苦しんだ。冬前に露軍を擊退しやうといふ目的を遂ぐる事が出來なかつた獨軍は、ポーランドに於ける冬期戰を覺悟をした

十月の末ポーランドに於ては、降雪の影響を受け露軍の攻勢が鈍り始めた。之が爲めに獨墺軍の退却は緩漫に行はれ、相當に強い抵抗を與へた。獨墺軍の方も輜重の停滯の爲めに苦しんだ。十二月には少し暖い日があり、地面が柔かになり、大砲の操縱が困難となり戰鬪は中止された。

この東部戰線では、軍事行動が天候と密接の關係を示した。少し暖い時は地面が柔かくなるので戰鬪が止り、寒くなるとまた始まる。即ち溫度の曲線と軍事的活動の曲線は正反對に動いたといふて宜しい

この期間の露軍の一事業は、降雪の中にカルパチヤ山を越ねたことである。寒氣と雪の爲めに非常に辛酸を嘗めた。

獨軍は秋の經驗によりて雪解け前に前進せんとした。處が此際獨軍の裝甲自動車は操縱甚だ不便であつたが、露軍の自動車は重量が獨軍自動車の五分一に過ぎぬ爲め、非常に便利であつた。ヒンデンブルグ將軍が二月の初に東プロシヤから前進して露軍を挾擊しやうとしたが、俄に雪解けが始

まつたので行動が鈍り、北の翼の前進が遲れ、南の翼と合することが出來なんだので、遂に長蛇を逸した觀がある、全く天候の影響である。三月末に東プロシアの湖水の氷を渡つて前進した獨の一軍團は俄に氷が解けて非常の損害を受けた。

カルパチヤ山中の激戰は三月中續いたが、敵味方共に得る所が無かつた、露軍は始めは非常の勢で、千辛萬苦正に嘗め盡して進んだが、後には其前進が鈍つた。天候のためか何か分らぬ。このカルパチヤ戰は今に一つの謎となつて居る。

二月の中頃露軍がブコヰナ（Bukowina）から退却したのは、洪水で後方との連絡を斷たれんとしたからである。

一九一五年五月より同年十月に至る

獨軍はニコラス太公の率ゐる露軍を挾擊して、一網打盡せんとしたが不成功に終り、露軍を逸した。獨軍は之を追擊した。獨軍は秋の降雨前にポーランドを片付け、鐵道線路全部を占領して冬營の準備をする必要があつた。そこで非常の努力をした。凡てが天候を基礎として打算されたものと見て宜しい。

一九一五年十月より一九一六年二月に至る

獨軍の冬營設備は中々完備したものであつた。露軍は寒氣の强い時は活動した。そして春の雪解けの時に至り獨軍は水のために非常に苦しんだ。此處の戰鬪は沼澤戰と稱すべきものであらう。沼澤の凍らぬ間は何等の防禦がいらない。敵味方遠方からにらみ合つて居る。凍つてる時は鐵條網を張つて防禦する。而して處々で一騎打が行はれる

一九一六年春夏

冬期の對陣に於ては獨軍は概して高地に據つて居つたから、雪解けが始まると露軍は自然退却するものと信ぜられて居つた。然るに兩軍共互に高地を占領しやうとして其處此處に戰鬪が行はれた

七月八月ガリシヤには洪水があり、軍事行動が鈍つた。其處で此方面の獨軍は他の方面に移された。

一九一六年の秋冬。

冬期には大規模の戰鬪はなく、小戰鬪が頻繁に行はれた。特に寒氣に馴れた露兵は時々獨軍を襲擊し、就中西伯利兵は大に武勇をあらはした。カルパチヤ山では九月二十日に雪が降り十月二十三日には處によつては積雪四尺に達して居つた。

一九一七年の春夏

天候の關係上二月初には大活動がなかつた。それから雪解けが始まり、續いて露西亞の革命が始まつた。獨軍は泥の爲めに砲兵や輜重の輸送が出來ぬから、革命を利用して追擊することが出來なかつた。

一九一七年秋より一九一八年初に至る

リガの陷落と共に獨軍がペトログラードに進擊するだらうといふ心配があつたが、降雨と惡路の時節であり、直ぐ之に續いて氷と雪の時節となるから、獨軍が無謀な進擊をせぬ事は明である。それでリガより前へは進まないで、西部戰線に向つた。之は後には政治的の原因もあるだらうが、始めは單に天候上の原因に基いたのである。

六　むすび

右に述べた處は極めて簡單であるが、尙ほ天候が如何に現代の戰爭に影響を與ふるものであるかの一班を知るに足ると思ふ。文明が進めば戰爭は地理とか天候とかを超越する樣に思ふ人もあるであらうが、事實は全く反對を示して居る。今日の戰爭は昔よりも一層地理や天候を能く利用せねばならぬ樣になつて來て居る。即ち廣義の地理學の必要が益々感ぜられて來る次第である。(大正七、十一、一)